論文概要の和文様式

雑誌におけるタイトル：

Severity of nausea and vomiting in singleton and twin pregnancies in relation to fetal sex: the Japan Environment and Children's Study (JECS)

和文タイトル：

つわりの程度と胎児の性別、胎児数の関連性について：子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）より

ユニットセンター（UC）等名：　高知UC

サブユニットセンター（SUC）名：

発表雑誌名：　Journal of Epidemiology

年：2019　月：　巻：29　頁：

筆頭著者名：　満田　直美

所属UC名：　高知UC

目的：

つわりは全妊婦の70～80%が経験するといわれる。胎児数や胎児の性別はつわり症状に影響を与える因子の一つと考えられており、本研究では、エコチル調査で得られたデータを用いて、胎児の性別や胎児数（単胎、多胎）によって妊娠初期のつわりの程度に差があるかどうかを検討した。

方法：

アウトカムであるつわりについての情報は妊娠中期の質問票のつわりについての質問の回答から得た。曝露因子は胎児の性別、胎児数（単胎、多胎）であり、多胎は胎児の性別の組み合わせにより3群にわけた。つわり症状の有無や程度を二値変数とし、分娩歴、母親の年齢、母親の妊娠中の喫煙、母親の教育歴、母親の妊娠前のBMIを交絡因子とし多重ロジスティック解析を行った。

結果：

解析の対象となった91,666人のうち、75,828 (82.7%) がつわりを経験していた。男児の妊娠に比べ女児の妊娠で、単胎妊娠に比べ多胎妊娠で、つわりを経験するリスクが高く、とくにより強い症状のつわりを経験するリスクが高くなっていた。さらに、多胎妊娠の中では女児二人の組み合わせの妊娠が最もこれらのリスクが高かった。胎児の性別と胎児数の間には交互作用はみられなかった。

考察：（研究の限界を含める）

胎児の性別、胎児数ともにつわり症状の有無や程度に関連していた。つわりの最重症型である妊娠悪阻については、多くの研究で胎児が女児であることや多胎妊娠がリスクと報告されているが、つわりの有無そのものと胎児数や胎児の性別との関連性については、過去の報告では結論は一致していなかった。サンプルサイズが大きいことはこの研究の強みであり、多胎を性別の組み合わせで3群に分けて検討することができた。一方で、つわり症状についての情報は自己申告であること、頻度や期間についての情報が得られていないこと、家族歴等遺伝的因子の検討が出来ていないことは研究の限界といえる。

結論：

胎児の性別、胎児数ともにつわり症状の有無や程度に関連し、女児と多胎はつわり、中でもより強い症状のつわりのリスク因子であった。つわり症状がひきおこされるメカニズムについては不明な点が多いが、今回の研究結果がその解明の一助となりうるかもしれない。